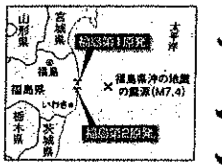
11/23 赤旗

原発 再び緊張

福島沖地震 福島第2の冷却一時停止

22日早朝に福島県沖で発生した地震と津波は、東日本大震災で被災した東京電力・福島第1、第2原発にも影響し、緊張が走りました。福島第2原発では、3号機の使用済み核燃料プールの冷却が1時間30分以上にわたって停止。福島第1原発では、汚染水処理などの事故収束作業を中断しました。（「原発」取材班）

すべて廃炉 県民の願い

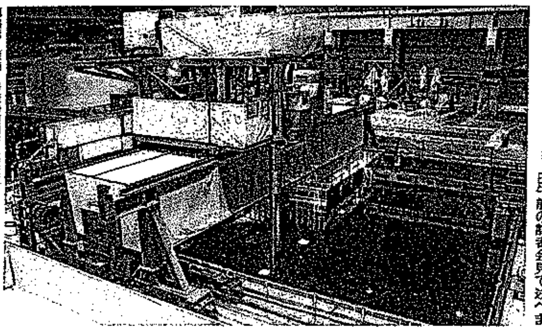


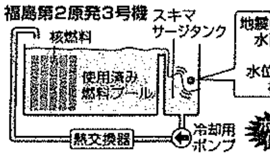
「東日本大震災後、福島第1、第2、柏崎刈羽原発で、地震によって大きな設備が止まったのは記憶にない」。福島第2の核燃料プール冷却停止について福島第一廃炉推進カンパニーの増田尚宏プレジデントは同日午前の記者会見で述べました。

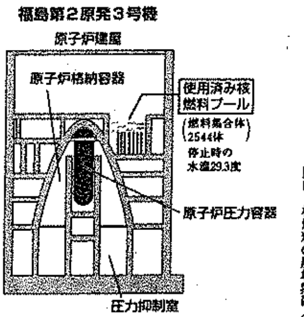
タンクの水位が低下

東電によると、地震発生から約10分たった午前6時10分ごろ、3号機プールの冷却水をためる「スキマサージタンク」の水位が設定値より低下したことを示す警報が発生し、冷却用ポンプが自動停止しました。通常の水位は設定値より20～120センチの範囲で変動していたといいます。

点検で異常は確認されず、東電は、地震で水面が上下したため警報が発生したと判断。同7時47分にポンプを起動して、冷却を再開しました。プールには使用済み核燃料2360体と未使用の核燃料184体の計2544体が保管されていました。冷却が停止した間に、核燃料の崩壊熱によってプール表面の温度が29・3度から29・5度に上昇しました。


福島第2原発3号機の使用済み核燃料プール＝2015年3月20日（東京電力提供）





この問題について東電が原子力規制庁に報告したのは同7時6分でした。冷却停止から報告するまでに1時間近くかかったことについて東電は「数値の確認など、情報整理に一定の時間がかかった」と説明しています。

また同原発では、地震によって構内配電線が停電し、空気中の放射性物質を監視する装置（ダストモニタ）が一時、停止しました。

福島第2、第1原発では、それぞれ最大で68・4ガル、54・2ガルの水平方向の揺れを観測（ガルは揺れの強さを示す単位）。両原発に設置された潮位計がそれぞれ6時31分、同38分に約1メートルの津波による海面上昇をとらえました。

汚染水の処理が中断

福島第1原発では地震発生時、原子炉建屋内の除染作業やタンク設置工事、カバー解体の調査などの作業が進んでいましたが、低い場所にいた作業員は、津波の危険から高台に避難。午前6時6分、建屋地下からの放射能汚染水の処理装置への移送を停止しました。

福島第1原発では、建屋地下にたまっている計7万8000トンの高濃度汚染水や施設に保管されている放射能汚泥が津波でさらわれて海に流出したり、タンクにためられた約90万トンの汚染水が地震で漏えいする危険性が指摘されています。事故で溶けた核燃料やプール内の使用済み核燃料が冷却できなくなること、損傷・腐食が進んだ1、2号機排気筒の倒壊も心配されます。

国や東電は、地震・津波について検討・対策を進めていますが、建屋の津波対策など工事が完了していないものもあります。

福島第2原発1～4号機は、東日本大震災の際に第1原発と同様に地震・津波で被災。炉心溶融には至らなかったものの、一時、危機的な状況に陥りました。

これまでに福島県議会と県内の全59市町村議会が、県内の原発すべての廃炉を求める決議をあげています。しかし東電も政府も、いまだに第2原発の廃炉の判断を示していません。

新潟知事「安全に万全を」

地震対応 会談延期の東電に

新潟県の米山隆一知事は22日、同日に予定していた東京電力幹部との初会談が地震への対応を理由に延期になったことについて、福島第2原発の安全に万全を尽くしてほしいなどとするコメントを発表しました。

米山知事は初当選後の県議会で、福島原発事故の徹底検証がなされない限り柏崎刈羽原発の再稼働は認められないとする選挙中に訴えていた立場を主張。22日に予定していた東電幹部との初会談でも、あらためてその立場を表明する予定でした。同日早朝の福島県沖地震を受け、東電側から延期したいと連絡が入りました。

米山知事はコメントで「東京電力福島第2原発では3号機の使用済み燃料プール冷却系が一時停止するトラブルが発生するなどしており、東京電力には安全確保に万全を期していただきたい」と求めています。会談については再度日程調整をするとしています。

圧力抑制室 壁面腐食か

福島第2の2号機

東京電力は21日、福島第2原発2号機の格納容器下部にある圧力抑制室の内部壁面（鋼鉄製）に腐食のような跡を見つけたと発表しました。

見つかったのは、直径約9・5ミリ、深さ約3・7ミリのくぼみ。板厚は設計上38ミリで、圧力抑制室の当該部位で必要とされる36・1ミリに満たない可能性があるといいます。

東電は、「安全上重要な機器等の機能に支障を及ぼすおそれのある故障」と判断。原因を調査するとともに補修を行うといいます。

圧力抑制室は、原子炉内の圧力を下げる設備。中に水をため、原子炉が高圧状態になった場合、蒸気を圧力抑制室に誘導し水で冷やして圧力を下げます。

2号機は現在、原子炉の核燃料をすべて取り出しています。1984年の営業運転開始から32年が経過。2011年の東日本大震災で被災して以来、停止中です。

福島県沖で22日に発生した地震で、東京電力福島第２原発の冷却システムが一時停止する事故が起こり、重大事故につながりかねないと県民の不安と憤りを呼びました。寄せられた談話を紹介します。

動いていなくても危険

ふくしま復興共同センター代表委員 斎藤富春さん

東京電力福島第2原発で燃料プールの冷却システムが一時、停止したとのことですが、原発は稼働していなくても危険なものです。

そもそも、原発過酷事故を体験した福島県民の最大の願いは「県内原発の全基廃炉」であり、これなくして避難者の帰還も福島県の復興もありえない。国と東電は今すぐ第2原発の廃炉を表明すべきです。そして、福島県で「危険だからいらない」と言っている原発は、全国どこでもいらない。国は、再稼働せず原発ゼロを決断するよう求めたい。

私たちは先日、新しい100万署名を軸とする「ふくしまの復興と原発ゼロをめざす大運動」を全国闘争として提起させていただきました。この運動を大きく広げたい。

地震にも津波にも弱い

原発問題福島県民連絡会代表 早川篤雄さん

今回の地震で改めて、東京電力の態勢が地震にも津波にも万全でないことを示しました。とくに東電福島第2原発の核燃料棒が原子炉建屋の燃料プールに入れるのはすぐ使えるからであること自体が問題です。

私たちは、燃料棒をキャスク（遮蔽機能をもった容器）に入れ、コンクリート建屋で管理する乾式冷却に移行するよう交渉のたびに求めました。東電は「そういう計画は持っていない」と答えるだけ。プールで、第2原発は再稼働したいということです。第2原発立地の楢葉町が昨年9月に避難指示解除されましたが、私を含め戻ったのは約1割です。第2原発の廃炉を明確にしないことが、9割の住民が戻らない大きな理由の一つです。第2原発の廃炉は本当に必要です。